

今日は「母の日」。幼稚園では、先週の金曜日、お母さん方を招いて「母の日参観日」を行いました。紙芝居を通して「母の日」の由来をお話しましたが、「母の日」に、お母さんに感謝する。それはお母さんがいろいろなことをしてくれるから。食事を作ってくれたり、掃除や洗濯をしてくれたり、赤ちゃんの時はお乳を飲ませてくれたり、おしめを代えてくれたり、いろいろなお世話をしてくれたから。そんなお話もした訳ですが、最近では、そういうお母さんの仕事・役割も段々変わってまいりまして、お父さんも食事を作る。お父さんも掃除や洗濯をする。赤ちゃんにミルクを飲ませたり、おしめを代えたり、そういうこともお父さんがよく手伝う。そういうご家庭も増えてまいりました。男女平等ということで、子育てもお母さんまかせではなくて、お父さんも積極的に参加して手伝う。そういう時代。それはお母さんも外に出て働き出したということもありますし、女性の地位が向上したということもあるのかも知れませんが、とにかく、昔とは大部変わって来たように思います。

で、これはどちらがいいか。昔のように母親が中心になって赤ちゃんを育てる、そういう方がいいか。それとも、お父さんも積極的に子育てに参加して、両親で子育てをする、そういう方がいいか。そういう問題もあると思いますし、また、母親の役割とか父親の役割というような、そういう問題もあるかも知れませんが、今日はそういうことを論じることがメインではありませんので、この当たりにおきたいと思いますが、いずれにせよ、最近では、子育てのスタイルも変わってまいりまして、昔のように母親中心の子育てでいいという、そういうことだけでは世の中通じなくなってまいりました。時代が変わると、いろいろなことも変わってまいります。いいか悪いかということは別として、そういう世の中の変化、移り変わりというものにも、私たちは気づかなければならないと思います。

はっきり申しまして、戦中、戦後の人たちにとっては、今はとっても住みにくい時代だと思います。価値観も違いますし、世の中が大きく変わったからであります。今では、小学生からパソコンの授業がありますし、大学生になったら、パソコンは必須。教科書や辞書のように買わなければならない。そんな大学もある。これは理系、文系関係ありません。うちの息子なんか文系ですが、単位を取るためにはパソコンが必要ということで、仕方なく買ってやりました。昔は、手書きのレポートの方が味があるなんて言っていた時代もありますけれども、今では、ワープロのレポートでないと受け付けないという、そんな大学もあります。とにかく、世の中、昔とは大きく変わってしまいました。昔の人にとっては、本当に住みにくい世の中でありました。でも、昔も今も、そしてこれからも変わらないものもある。それはイエス・キリストであります。ヘブライ人への手紙 13 章 8 節には、「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはないお方です」とあります。時代が変わり、社会が変わり、世の中が変わっても、「きのうも今日も、また永遠に変わることはない」イエス・キリストを信じ、イエス・キリストに従って歩んで行く者でありたいと思います。

ところで、今日は、このあと、聖餐式のほかに、教会役員の任職式、子どもの教会のスタッフの任職式、また幼稚園の教職員の任職式などもありますので、先程お読みいただ

きました聖書の所から一つだけ学んでおきたいと思います。

で、今日のお話は、有名な「サマリアの女の人のお話」、その最後の所ですけれども、ここには、イエス様と出会ったサマリア人の女の人の証しによって、多くの人がイエス様を信じたということと、それからもう一つ、更に多くの人々がイエス様を信じたけれども、彼らは「私たちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない（サマリアの女の人の証しによるのではなくて）。自分で直接イエス様からお話を聞いて、「この方が本当に世の救い主であると分かったからだ」と、こうサマリアの女の人に語ったという、そういう所であります。

サマリアの女。今、婦人会では、A・カイパーの「聖書の女性」（新約篇）というのを学んでおりますけれども、この中にも「サマリアの女」というのが出てまいります。いずれまた婦人会でも学ぶことになるのだと思いますけれども、サマリアの女。この人は過去5人の人と結婚し、そして今はまた別の人と同棲している、そういう人でありました。ですから、人によっては、この人は「ふしだらな女」、そういうイメージを持つ人もおりますし、あまり良い印象を持たれない、そういう人であります。

でも、こんな「サマリアの女」好きだという人もいますね。もう亡くなりましたけれどもクリスチャン作家の三浦綾子さん(1999年10月12日召天)。彼女は、生前「聖書の中に出てくる女性の中で、誰が好きですか」と尋ねられたとき、ヨハネ4章のこの「サマリアの女が好きだ」と答えたそうであります。(生きること、思うこと p.14)。

理由はと言いますと、一つは、自分も昔、かなり似たようなところがあったからだというのでありますね。若いとき、綾子さんは異性の友だちも多く、バンプ(妖婦)なんて呼ばれたこともあったそうであります。バンプ(妖婦)、それは「男をまどわす女」というような意味ですけれども、結構男友だちも多くて、誰かとうわさなんか立てられると、これ見よがしに、その人と連れ立って歩いたりもしたといいます。時代が時代でしたから、そういうことで世間のうわさになり悪評を立てられたということで、このサマリアの女の人に親近感を覚えるというのであります。

二つ目は、このサマリアの女の人のオッチョコチョイなところ。イエス様から、自分の乱れた生活をズバリ言い当てられて、ハッと驚き、自分が水くみにきたことも忘れて、大切な水瓶をそのままそこに置き、町に行き、イエス様のことを言いふらしたという、そういうオッチョコチョイさ。誰にも顔を合わさないようにということで、わざわざ人のいないときを見計らって水くみに来たのに、「わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます」と叫んで町の人に知らせた。町の人みんなこの女がどんな女なのかよく知っていた訳でありますね。「ふしだらな女」、そんな評判の悪い女が、「自分のことをすべて言い当てた人がいる」なんて触れ回る。しかも、自分もまだよく分からないのに「もしかしたら、この方がメシアかも知れません」なんて言って、騒ぎ立てる。三浦綾子さんは、「ここを読むと、私はこのサマリアの女が、はなはだかわいくなってしまおう」と書いております。それは自分にも、そういうオッチョコチョイの軽薄さがあるからと例を挙げておりますけれども、確かに、このサマリアの女の人には、そういうオッチョコチョイなところもあるようであります。

でも、三浦綾子さんが最もこの「サマリアの女」に惹かれるのは、この人が「キリストと、人々との間に立ちただけの謙遜な証人」だからだといえます。先程お読みいただきました今日の聖書の所にありますように、この「サマリアの女の人」の言葉が、多くの人々がイエス様を信じるきっかけになりました。「その町の多くのサマリア人は、「この方

が、私の行ったことをすべて言い当てました」と証言した女(サマリアの女)の言葉によって、イエス様を信じた」のであります。でも、そのあと、このイエス様を信じた人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるように頼み、そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じたのでありますね。そして、彼らはこの「サマリアの女」に言いました。「私たちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。私たちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです」。こんなふうに言ったといひます。

この最後の言葉は、イエス様のことを知らせた「サマリアの女」に対して、少し冷たい言葉のようにも思えます。彼らはこの「サマリアの女」に対して、何の恩も着てはいないようであります。むしろ、この人を無視するような、そんな言い方のようにも思える。「私たちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。私たちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからだ」。でも、こんなふうに言われても、この「サマリアの女」は、何も言わない。何も語らない。三浦綾子さんは、彼女は「キリストと、人々との間に立ちはだからない謙遜な証人」ではないかと言うのであります。そして、自分もそんな「謙遜な証人」になりたいと言っております。

いいことをしたら人から評価されたい。それは人間の常であります。でも、人から評価されなくても、自分は忘れ去られても、一人でもイエス様を信じる人が現れるならば、それでよしとする。それで満足する。それが「謙遜な証人(証し人)」のあり方であります。私があの人を伝道した。私のおかげで、あの方は教会に来るようになった。そんなことは言わない。言う必要はない。「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」(ルカ 15:10)という、神様の喜びを大切にする。自分は、目立たなくてもいいのであります。自分は、人がイエス様と出会う、そのきっかけを作ればいい。それでよしとする。それが「謙遜な証人」。

三浦綾子さんが、この「サマリアの女の人」を「謙遜な証人」と見るのは、文学者・作家らしい見方かも知れませんが、私たちに大切なことを教えているようにも思います。私たちも、人から評価してもらいたいからするのではなくて、人から評価されなくても神様はちゃんと評価してくださるのですから、目立たなくてもいい、ひっそりでもいい。でも、一人でもイエス様のところに連れてくる、そういう「謙遜な証人」になりたいと思ひます。